



春野屋漆器工房 小林広幸さんに聞く

1 2 3

Like 0 コメント

漆塗り職人 春野屋漆器工房 小林広幸

1958 長野県木曾郡檜川村平沢に生まれる
1980 学卒後、父貞治の経営する春野屋漆器工房に入る
1988 瓦葺漆地帯を考案
1996 瓦葺漆地帯実地を考案
2004 伝統工芸士認定
木曾平沢に在住しながら、全国各地で出張を開催。
近年では漆塗り技術を建築に活かす試みもしている。

インタビュー実施日時：2009年2月16日
於：春野屋漆器工房（木曾平沢）
聞き手：持留ヨハナエリザベート（職人がつくる木の家ネット）

店と工房が一体となった漆器屋さん

諏訪湖西端の岡谷から大きく南へとまわりこむ中央自動車道から分かれる長野道の二つめ、塩尻ICでおりる。国道19号線（旧・中山道）を名古屋方面に走って行くと、ぶどうやりんごの畑の広がり次第になくなり、道の両側に山がせまってくる。空が狭くなったなーと感じ始めた頃「これより木曾路」という看板が出て来た。中央西線の線路と19号線が並走する中山道筋に長く家並みが延びる集落を二つほど過ぎると、漆塗り職人の工房や店が軒を並べる旧・檜川村、木曾平沢の集落への入り口にたどり着いた。雪が少し、舞っていた。



春野屋漆器工房は、木曾路平沢宿の中心街にある。あたり帯がこのようなすはらしい風情。

約束の時間に春野屋漆器店を訪れると、店の奥へと通された。間口はそう広いがないが、京都の町家のように建物と奥へと続いている。細長い土間を抜け、うるしの入った紙製の丸箱や木地のままの大皿などが積まれているつきあたりの左手前の板戸をがらりとあけると、塗りの注文品が積んであるやがらんとした部屋。そこから急勾配の階段が2階にあがると、工房だ。階段を登りきったところには上げ板がある。工房が2Fの奥まった狭いところにあるのも、上げ板で下と遮断しているのも、漆塗り作業が埃やチリを嫌うためだ。

黒や赤の漆のたくさんついた大きい作業台に向かって春野屋さん小林広幸さん（伝統工芸師）が座り、鉢の中のどろどろ黒い液体を木のへらでかきまわしている。手を止めることなく「すみません、急いでこれ、やんなくちゃなくなると、忙しそう。米脂のような深いツヤのある、どろりと重たいその液体が、漆だ。隣の作業机ではベテランの女性が木地に漆を下塗りした表面を、サンドペーパーで磨く「研ぎ」の作業をし、事務机では若い女性がパソコンで図面を描いている。3人で切り盛りする、小さな工房だ。

小林さんは先祖代々「春野屋」という屋号の、塗り職人の家に生まれた。家内制手工業のため、小さい頃から家の手伝いでお椀やお盆に漆を塗るのあたりまえのことだった。大学は法学部に進学したが、卒業後、父の意思で家業を継いだ。はじめのうちは専ら父の作品を売り込む営業に携わったが、父が元気なうちに父の技を受け継がないと、ということで筆をもつようになった。「ほとんど教えてくれなかったですね。見て覚えたり、同じ町内で『師匠』として尊敬する先輩に教わったり。外での修業はしていないで、ずっと春野屋です」先代が亡くなって春野屋を継ぎ、9年になる。



(左上) 気長に摺押した黒目漆を和紙で漉す (右) 漆の出来上がり色や選け具合を確かめるガラス板 (左下) カフェオレ色の生漆（きうるし）

漆の木の樹液が黒光りする漆になるまで

「最初からこんな風に黒光りしているわけじゃないんですよ」と、春野屋さんは別の鉢のラップをめくって見せてくれる。そこには白茶けたカフェオレ色の液体があり、空気に触れただけで、わずかに色が濃く変色していくのが分かる。「これが漆の木を傷つけて掻き取った樹液を濾した生漆（きうるし）。これをへらで掻き回して空気に触れさせたり、熱を加えたりするうちに、酸化還元を繰り返して、水分も抜けて、こんな感じに黒くなっていきます」

とろりととろとろと黒光りする液体を、春野屋さんは時折はけでガラスに塗って光にかざす。褐色に透けるその具合で乾き加減を見る。「これで、よし」となったところで、鉢の中身を和紙にすっきり受け、和紙の両端をねじって止める簡単な道具にかけた。和紙の繊維を通して、不純物を濾し取るのだ。一杯ん、とろんと、と滴り落ちる汁を、また鉢で受ける。この鉢一杯で、100以上ものお椀が塗れるという。

塗っては乾かし、研いでは塗り・・・

「塗り作業に入る下地として、錆び土を使うのが木曾漆器の特徴なんです」と、こんどは春野屋さんは錆び土に漆をまぜてパテ状にしたものを、木地のままの小皿につけていった。木地表面のちょっとした欠けや歪みもこの工程で修正していく。漆器の産地の中でも、下地に使える「錆び土（さびつち）」とよばれるこの鉄分の多く含んだ土は、木曾にしかない。輪島漆器では地の粉と呼ばれる珪藻土を使う。「昔から漆器の下地は主に京漆器で使われていた砥の粉（とのこ）をつけるが、砥の粉は風化しやすい。木曾や輪島の漆器が堅牢で使いやすいのは、錆び土、地の粉下地だからです」

下地がついたら、乾いたらサンドペーパーで磨いて面を平滑にして、いよいよ漆を塗る。漆は数回重ね塗りするが、塗りの一工程ごとに、室（もど）で乾かす。乾かすといってもいわゆる乾燥ではない。湿度85%、温度24度という高温多湿な環境のもので硬化させる。塗っては乾かし、乾かしは研いで、また塗る。すべてがコツコツとした手作業だ。「仕上げ塗りはみんなが休む日にまとめてしたりしています」仕上がりを決める上塗り、息を詰めて、神経を使いながらの作業。そばを人が歩くだけでも空気が動いて仕上がりを左右してしまうからだ。

日常使いに耐える堅牢さが、木曾漆器の魅力

「一般に漆器というと、蒔絵など、きらびやかな加飾の技術が見せどころなのですが、木曾塗りは塗り専念してきた産地ならではの、なぜそんなのか。輪島塗は、会津塗りなど、中央から離れていても漆器で有名なところは昔、殿様が抱えの職人衆を連れていったところだ。ところが木曾は、そうではない。街道筋を往來する旅人に、豊富にとれる木曾の漆で塗りあげた食器などを売り、生計を立てる、いわば街道筋のなり目として発展したのだ。木曾のお椀、お盆、箸などは、旅のみやげものとして京大阪で評判を呼んだ。



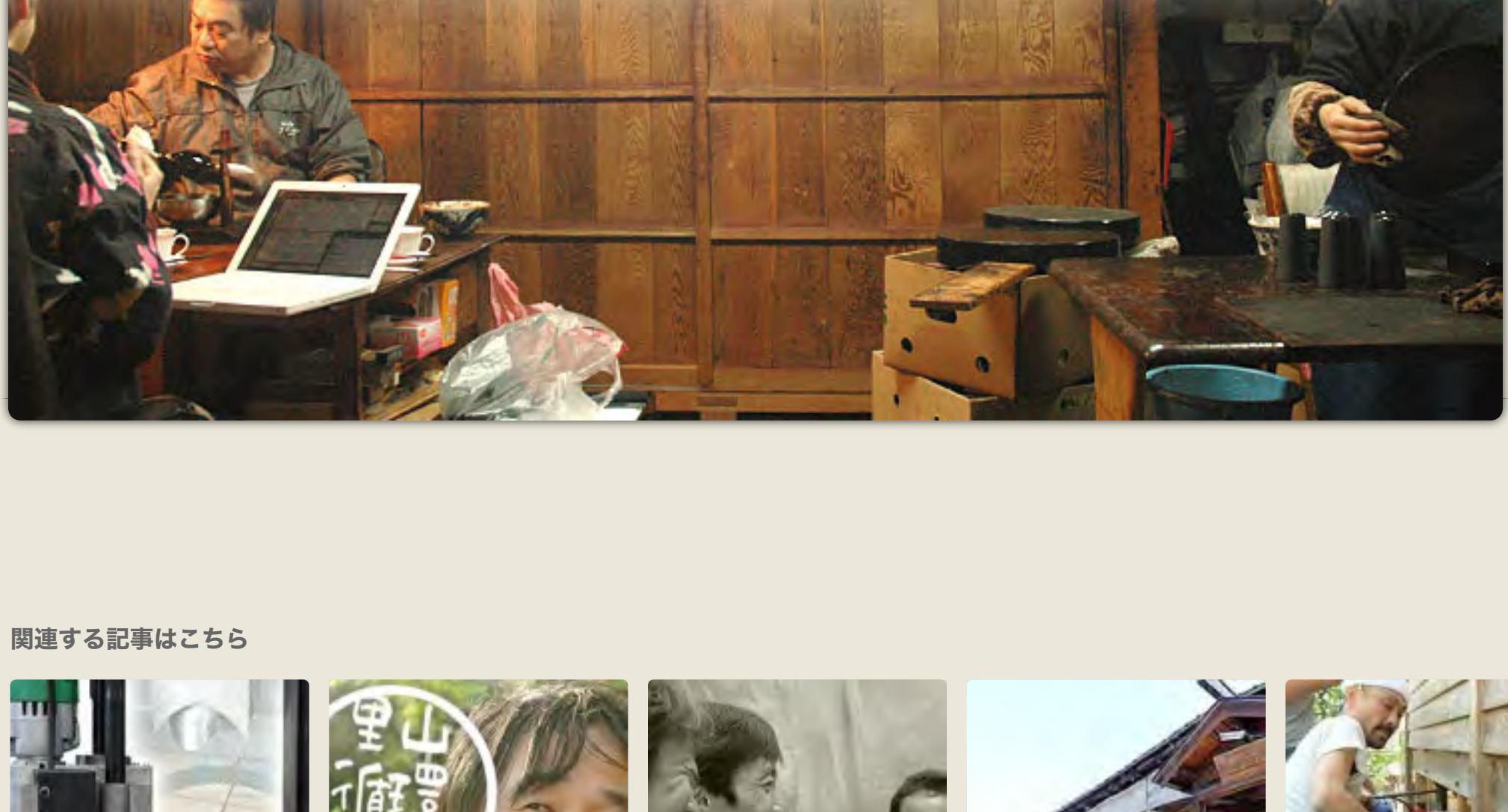
小林さんの二男も通っている平沢小学校の給食風景と、給食に使われている地元産の漆器の食器セット。この取組が農水省のサイトで紹介されている記事はこちら

「素朴さ、堅牢さ」が持ち味の木曾漆器は、食器として、座卓として、茶の湯や晴れの場というよりは、日々の生活に用いられてきた。「漆」というと贅沢品と思われがちですが、そうではない。使いやすく、長持ち。このへんの小学校では、学校給食に漆器を使っていますよ」光沢、手触り、口当たり、そして軽さ。繊細な感覚を呼び覚ましてくれる本物の道具に日々触れる日常の、なんと豊かなことか！

Like 0 コメント

1 2 3

小林さんの後ろの板戸の向こうは、工房の幅いっぱい「モロ（室＝むろ＝漆の乾燥室）」高温多湿の状態、ゆっくりと漆の乾きを得つ。



関連する記事はこちら

- 込み栓角ノミ 復活！ 松井 里山循環大工・池山琢磨（一筆建築設計）
- きらくなたてものやチーム：家づくりを自分の手に！
- NPO開業賑わい屋敷・曳馬工務所：この家が欲しい！の記録
- 大工たちによる「家匠」の記録

北海道・東北	関東（東京以外）	甲信越・北陸	東海	関西	中国・四国	九州
北海道 青森県 岩手県 宮城県 秋田県 山形県	栃木県 群馬県 埼玉県 千葉県 神奈川県 東京都	新潟県 富山県 石川県 福井県 山梨県 長野県	岐阜県 静岡県 愛知県 三重県	滋賀県 京都府 大阪府 兵庫県 奈良県 和歌山県	鳥取県 岡山県 広島県 山口県 徳島県 香川県 愛媛県 高知県	福岡県 佐賀県 長崎県 熊本県 大分県



春野屋漆器工房 第三十三回
小林広幸さんに聞く

1 2 3

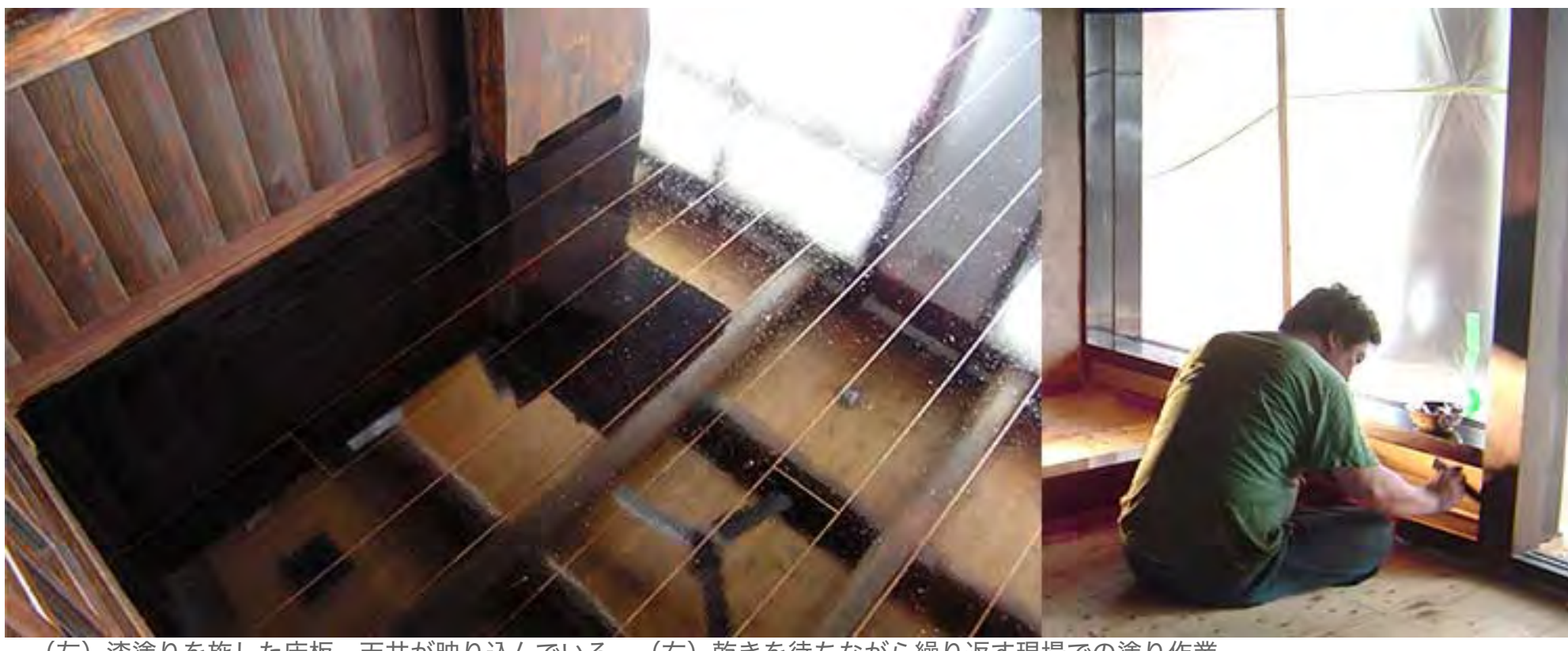
Like 1 Post

漆は、木を水から守る最高の自然塗料

なぜ、漆塗り職人である春野屋さんが木の家ネットのつくり手会員なのか？ それは春野屋さんが木の家づくりに積極的に関わっているからだ。「木は水に弱いでしょう？ 漆は撥水性の高い、丈夫な塗膜をつくる、すぐれた自然塗料なんです」春野屋さんが漆塗りを特に勧めるのは、トイレや台所の床、キッチンカウンターの板、そして浴槽などの水回り。「漆を塗ることによって、木が腐らないといったら言い過ぎですが、少なくとも木が腐っていくサイクルをより長くすることは確実にできます」

春野屋さんの店と住まいの間に立てられてた障子の枠は黒漆塗り、柱は朱塗りだ。「親父が塗ったそのままですよ」という表面は、美しくツヤを帯び、長い時間の経過を感じさせない。木曾平沢の塗り師の家では、柱や建具を自分で塗るのはごくあたりまえのこと。床の間の塗りを人に頼まれることもある。ところが、木の家づくりに乗り出そうとした時、先代は反対した。「床に漆を塗るといことが、親父にはゆるせないですね。足で踏むものに漆を塗るなんて！」

「そういえば、小さい頃、座卓を傷つけてもそんなに怒られないのに、上に乗るとものすごい剣幕で怒鳴られましたね。『漆で塗った面は足で踏むものでない！』というのは、塗り職人独自のプライドです。今となっては親父の気持ちも分らないでもないです」それでも、自然な家づくりをする仲間たちとのネットワークの中で漆のよさを広めていくということで、何とか父を説得した。「俺が工房で家づくりの現場におさめる材を塗っていても、3年間はまるで無視でしたねー」

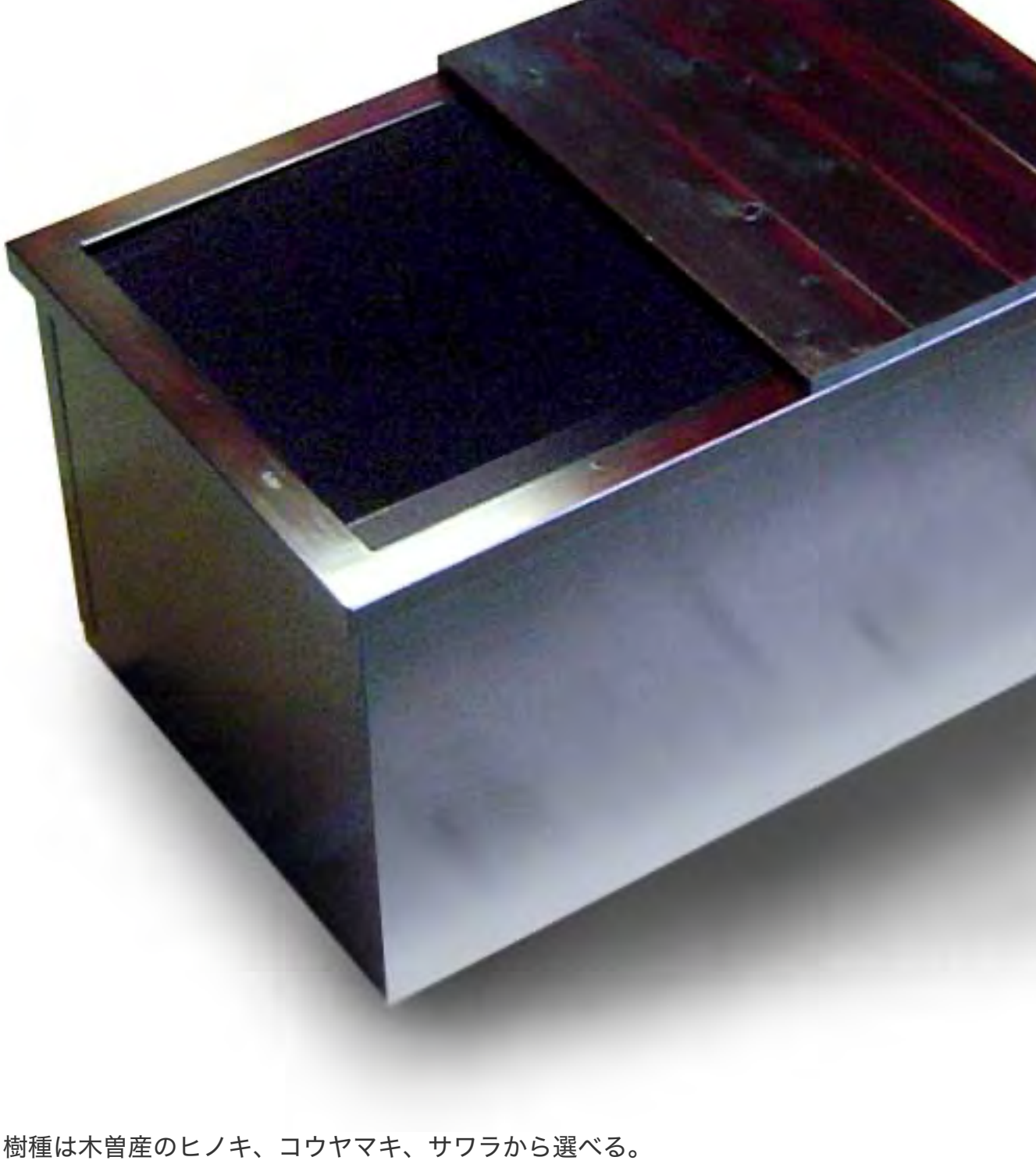


(左) 漆塗りを施した床板。天井が映り込んでいる。(右) 乾き待ちながら繰り返す現場での塗り作業。詳しくは春野屋さんのサイトのこのページへ

家づくりで漆を塗るのも、工程は同じだ。一回塗っては最低でもひと晩ずつ時間をおいて、最低5回は塗り重ねる。「時間がかかるんですよ。現場塗りを頼まれることが多いんですが、本当は状態を確かめながら十分に乾かしたいので、材をお預かりして工房で塗りあげてから納めたいというのが本心です。現場は埃も多いしね」と言いながらも、普段は工場にこもっての仕事なので、たまに現場ではおの職人さんたちと一緒に仕事をするのは楽しい、刺激になるようだ。「塗り上げた材を納品するのだと、傷つけては大変、と大工さんが気にするのは？」と質問すると「万一傷がついたら、ちゃんとこっちで補修するから、大丈夫！」と心強い返事がかえってきた。

長持ちして手入れが楽。漆塗りの浴槽が大人気

最近春野屋で人気なのが、漆塗りの浴槽だ。木地師に特化した浴槽のすべての面を漆で塗り直す。「全部塗る、というのが防水上大事なんです」キッチンカウンターの依頼で「表だけでいいから」と言われても、必ず両面と側面も塗る。塗っていないところから水が入っては、漆を塗った意味がなくなるからだ。「浴槽もそうです。排水口や追い炊き口の木口に至るまで、塗ります。現場取付で穴をあけるのは論外！」



漆塗りの木の浴槽。樹種は木曽産のヒノキ、コウヤマキ、サワラから選べる。詳しくは春野屋さんのサイトのこのページへ

木の浴槽の耐用年数は樹種や使い方によりさまざまですが、木と木の合わせ目や釘目から水が入って腐っていくことによって取り替え時を迎える。木に漆を塗りまわしておけば、ぐんと長持ちする。「最初に浴槽を手がけたのが20年前。この間久しぶりに見に行ったら、まだ大丈夫でした」つくり始めて以来、ダメになったという話はまだ聞いていない。木の浴槽をただ買うよりは漆を塗り直すのは張るが、もつ年数を考えれば決して贅沢ではない。手入れといっても、木のお風呂のように湯垢がつくことがないので、水を抜いた後、タオルでやさしく拭くだけ、と簡単だ。傷つくことにもそんなに神経質になることもない。「ある旅館のおやじさんがデッキブラシで掃除しようとしただけは、さすがに止めたけどね」

「ただ、漆かぶれだけは困りますので、浴槽が欲しいという方にはあらかじめテストをしていただきます」サンプル用に造った漆を塗った板に、下腕の内側など目立たないところで触ってみてもらって、かぶれ症状があらわれないか確かめてからしか、塗りの浴槽は売らない。じつは春野屋さん自身が、塗り師でありながら漆にかぶれる体質。液体状の漆でかぶれることはあっても、できあがって3ヶ月以上おいて完全に乾いている塗器でかぶれることはあり得ないのだが、それでも自作の漆塗りの風呂に試しに入った時は、おっかなびっくりだったとか。「いや～さすがにお尻を底面につける勇氣はなかったですねー」

漆塗りができるのは、材料や道具があってこそ

前向きで明るく、進取の氣に富んだ春野屋さんは、木曾平沢の組合でも木曾漆器の将来を切り拓く役を担っている。話していると小林さんのアイデアがどんどん広がっていく。「トイレの洗面ボールなんてどうですかー？」と提案すると、「う～ん、そうなる」と山の問題がからんでくるんだよね」と顔を曇らせた。「そうだな、木取りの話からしないとな。塗りに使う木地は、割れたり狂ったりしにくいように、芯や外縁(白木部分)を避けて、縦に取るんです。洗面ボールは丸みがあって、しかも直径が大きいでしょ？ 芯から外縁の内側で、洗面ボールの直径分をとるとなると、相当な径がいる。木曾の山でも、それだけの径の木はなくなってきてるんですよ」



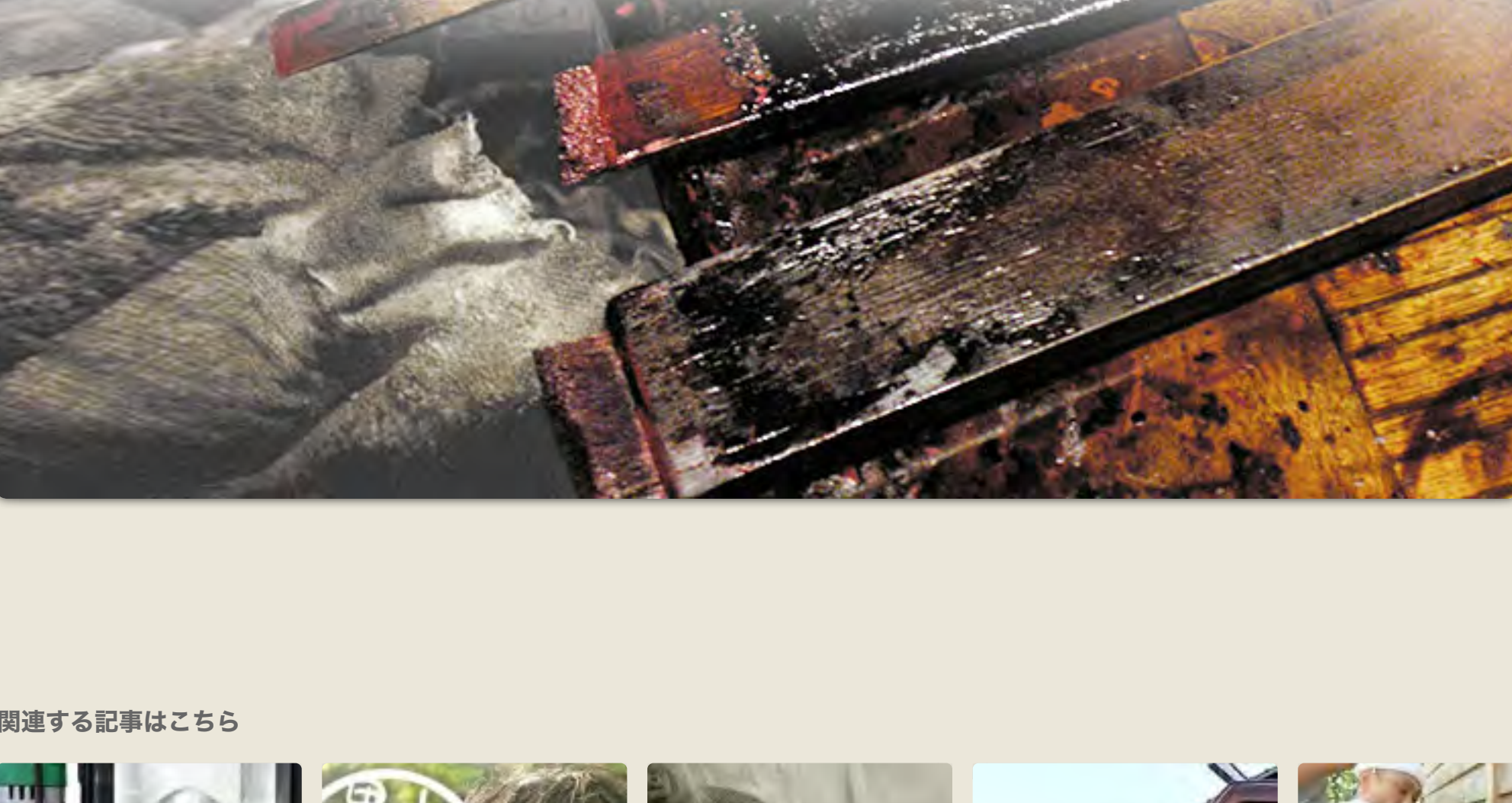
お勤めの新商品「つくんぼ」は、漆塗りの細身のタンブラー。「冷酒を飲むショットグラスとしてお使いください」と春野屋さん。

材料だけではなく、「もうひとつこれから大変になってくるのが、道具です。ヘラなんかは自分でつくれるけれど、塗りの刷毛は人の毛から、専門の職人がつくるものです。ところが、漆刷毛職人は、もう日本に数えるほどしかいない」その方が亡くなったら？「だからこそ、昔の名人の刷毛が問屋さんにあれば迷わず買うようにしているし、塗り師を廃業する方にもらうこともあります。そうやって集めておかないと」以前、木の家そもそも話「道具と大工」で、鑿をつくる左久作さんのことを紹介した。手仕事で未来に続いていくためには、材料と道具の問題が常に背後にある。

Like 1 Post

1 2 3

漆塗りの道具。上から1本めのヘラは、自分でつくるもの。下の2本は専門の職人が女性の毛からつくる漆刷毛。漆でギトギトにかたまっている。



関連する記事はこちら

- 込み栓角ノミ 復活！松井 鉄工所訪問記
- 里山循環大工：池山琢馬 (一筆建築設計)
- きらくなたてものやチーム：家づくりを自分の手に！
- NPO関普賑わい屋敷・現 家事工：この家が動く！
- 大工たちによる「家戻し」の記録

北海道・東北	関東(東京以外)	甲信越・北陸	東海	関西	中国・四国	九州
北海道 青森県 岩手県 宮城県 秋田県 山形県	栃木県 群馬県 埼玉県 千葉県 神奈川県 東京都	新潟県 富山県 福井県 石川県 山梨県 長野県	岐阜県 静岡県 愛知県 三重県	滋賀県 京都府 大阪府 兵庫県 奈良県 和歌山県	鳥取県 岡山県 広島県 山口県 徳島県 香川県 愛媛県 高知県	福岡県 佐賀県 長崎県 熊本県 大分県



春野屋漆器工房 第三十三回
つくり手リスト

1 2 3

Like 1 0 コメント

恥ずかしながら、の弁当箱

八ヶ岳南麓の我が家から本曾路の春野屋さんまで車で一時間少し。取材当日、午後には帰ってなければならぬ用事もあり、昼の弁当をもっていった。さんざん使い込んだ弁当箱は、9年前に東京のデパートで思い切って買った漆塗り、長方形の箱が二段重なる、お重型だ。一組5000円を2組買った当時は、結構勇気が要った。

角があたって、漆がはげている「あのう、ちょっと恥ずかしいんですが、これ、見てもらえますか?」「おいしそうなお弁当だ」「(そうじゃなくて・・・弁当箱を!)本漆っていうんで買って、愛用してるんですけど」弁当箱の表面は漆らしいのだが、裏面の感触が違うような気がずっとしていたので、訊いてみた。春野屋さん、ふたを取り、本体の表裏を見て「漆塗りだね。いいじゃないですか。けど、ベニヤに吹き付けだな」天然の本漆は粘度が高いため、スプレー塗装はできない。すべてが手で刷毛塗りで、高温多湿で管理する乾燥工程を何度も経なければならず、量産には向かない。そこで、外食産業などで使われる量産食器には、カシューナッツの脂をベースに天然漆をほんの少し加えた「代用漆」が使われる。代用漆ではなく天然漆をスプレー塗装できるように開発した「本うるし」という量産技術もあったりで、なかなか見分けにくい。



(左) 筆者が持ってきた弁当箱 (右) 春野屋製の弁当箱

「ちょっとうちの、出してみて」と室から春野屋製の弁当箱が出てくる。木曾の曲げ物に手で刷毛塗りの本物だ。色、艶、手触りともに「ああ、やっぱり違うな〜」とため息。しかし、春野屋さんが勧めてくれたのは買い替えではなく、塗り直しだった。「一ヶ月見てくれたら、塗り直します。うんとよくなるよ」もう来年で10年になる弁当箱、買い替えもしかたないかな、と思っていた矢先、使い続けていける希望が見えて来た。

過酷な使用状況にも耐えて形を保っている愛用の弁当箱だが、側面の合わせりに隙間ができていた。くっついてはいるのだが、心もとない感じ。「こんなになっちゃうの、なんとかありませんか?」「塗り直しをすればちゃんとくっつきますよ。漆は強力な接着剤でもあるんだから。蒸気機関車の錆び止めに使われていたし、戦争に行った親父は、戦艦武蔵の船底に漆が塗ってあったって言ってたな」そうか、それは心強い!

漆はすぐれた接着剤!



(左) 鉄の鏝(かすがい)で補修した茶碗(東京国立博物館蔵) (右) すっぽりと取れてしまった注ぎ口を「金継ぎ」で補修したウェッジウッドのティーポット

日本には、欠けた陶器や磁器を漆で接着し、金で化粧する「金継ぎ」という独特の技術がある。これが中国や韓国ではそうではない。「馬蝗絆(ばこうはん)」という宗代の有名な青磁の茶碗が東京国立博物館にある。「室町時代の將軍足利義政がこの茶碗を所持していたおり、ひび割れが生じたため、代わりのものを中国に求めたところ、明時代の中国にはもはやそのようなものはなく、鉄の鏝(かすがい)でひび割れを止めて送り返してきたという。これを大きな蝗(いなご)に見立てて、馬蝗絆と名づけられた」とある。

ところが日本では、修繕以上の表情をもたせる工夫をする。金だけでなく銀や漆のままで仕上げることもある。塗った後の磨き具合で光沢をどの程度もたせるかも変わってくる。継ぎ跡がその器の新たな景色となり、価値をあげた例も多々ある。

ものは大事に、壊れたら直して、使う

「塗りの仕事でまず教わるのは、修繕ですよ」修繕作業を通して、漆器や陶磁器、そして漆の性質がよく理解できるということもある。新しくつくだけが技術でない。使い続けるために直すことを大事にする文化がちゃんとあるのだ。「リメイク、リユース、リサイクルなんて英語でかっこよく言わなくても、昔から普通のことだったんだよね」と春野屋さん。

「手づくりのものは、そう簡単に捨てられない」という心情は誰にもある。ところが、デパートで買った「本漆の弁当箱」は、どこで直してもらえばいいのか?となると、分からない。買った時の説明書に書いてあったかもしれないがもうどこかへ行ってしまったし、買う時にデパートの店員さんが「何かあったら、ここで直せますよ」と言葉を添えるわけでもない。「買っていた方には、うちに出してくれば直して使い続けていけることを説明します」と春野屋さん。つくり手が見えるって、こういうことなんだな、とあらためて実感したのだった。

「今の日本って、面倒くさいことを嫌うために、手放してるんですよ、せつかく手に入れたものを。もったいないですよ」と春野屋さんは言う。塗りのお椀、壺、障子、綿布団。社会全体が貧しかった時代、庶民が暮らしに用いることのできなかった「いいもの」が、誰の手にも届くようになった。「いいもの」はメンテナンスしてこそ、長く使えるし、その価値もあがっていく。漆器の塗り替え、壺の表替え、障子の張り替え、布団の打ち直し。古くなったものを捨てて新しいものを買うのではなく、そのものを再生させるために手間やお金をかける文化が、かつてはあった。ところが、メンテナンスや再生が「面倒なこと」「お金のかかること」として嫌われ、せつかく手にできるようなったはずの「いいもの」から、自ら身を引いていく、というのが現実だ。

職人の手による本物を使う日常を

面倒なのはイヤ、お金はいつもある程度はある。結果的に「古くなったら捨てて新しいのをまた買えばいい」という生活様式になり、短いサイクルで使うものならば「安物で十分」となってしまう。いや、「安物しか知らない」時代になりかけているかもしれない。手づくりの知物に大事にするかわりに、量産品を使い捨てる世の中が失ったのは「本物の感覚」だ。漆器のお椀を手にし口をつけた時のなじむ感じ、藁床に草の量に寝転んだ時のいい香り、一日の時間の経過とともに光の表情が変化していく障子、お日様にあててふかふかに戻ったふとんに変化する時のかさ。職人の手仕事が生み出した「いいもの」を大事に使う暮らしの中でこそ「はじめて味わえる」実感が、ある。

いいものを大切に使う暮らしの中で五感が自然と磨かれ、季節や豊か、人の営みに対する繊細な感受性が育まれる。それが豊かな暮らし文化なのだ。「職人がつくる木の家」に住むこと、長く住み継いでいくことは、そうした感覚のひとつひとつを「取り戻す」あるいは「身に付ける」ことなのだ。春野屋さんの取材を通して、そう確信したのだった。

Like 1 0 コメント

1 2 3



関連する記事はこちら

- 込み栓角ノミ 復活! 松井 重山循環大工:池山琢馬 (一筆建築設計)
- きらくなたてもやチーム:家づくりを自分の手に!
- NPO関善賑わい屋敷・曳家工事:この家が動く!
- 大工たちによる「家匠」の記録

事務局
〒111-0906
岡山県倉敷市児島下の町5丁目7-3
児島倉内
mail: jimukyoku@kino-ie.net
tel: 086-486-5464

地域別つくり手リスト

北海道・東北	関東(東京以外)	甲信越・北陸	東海	関西	中国・四国	九州
北海道	栃木県	新潟県	岐阜県	滋賀県	鳥取県	福岡県
青森県	群馬県	富山県	静岡県	京都府	岡山県	佐賀県
岩手県	埼玉県	石川県	静岡県	大阪府	広島県	長崎県
宮城県	千葉県	福井県	兵庫県	兵庫県	山口県	熊本県
秋田県	神奈川県	山梨県	奈良県	奈良県	徳島県	大分県
山形県	東京都	長野県	和歌山県	和歌山県	香川県	愛媛県
	東京都				高知県	